

秋季セミナー開催に寄せて

東京矯正歯科学会

会長 榎 宏太郎

ようやく秋も深まり、四季の美しさを感じる日々になってまいりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。

今年も恒例の東京矯正歯科学会秋季セミナーを開催いたします。

今回のテーマは、「抜去か？保存か？第三大白歯の適切な対応を再考する」です。

学術委員会では、診断時から保定まで、矯正歯科治療のすべての期間における第三大白歯の位置や動きを推定することの困難性や、今まで経験したことのない超高齢社会を迎えて歯牙素材を再利用することの重要性、アンカースクリューを埋入するための歯列後方のスペースの多様性、などについて深く話し合われました。

顧みれば、従来の歯科矯正学においては、歯列後方部の成長発育変化の詳細や第三大白歯の利用に関する臨床的な情報は非常に少なかったように思われます。そこで今回は、山本先生から解剖学のご講演をいただきます。また、移植のご経験の豊富な丸川先生からは、再利用の条件や第三大白歯の抜去基準について最新の知見をご紹介します。そして、友成先生からは、さまざまな症例から、第三大白歯を咬合に参加させる際の留意点をご講演いただく予定です。

このテーマをさらに深く掘り下げて考え続けると、検診時のアドバイスや矯正診断時のタイムスケジュール立案などにも直接的にかかわってくるでしょう。そして数年後には、再生医療のさらなる応用や、関与する遺伝子を用いた萌出の診断、進化の過程における退化傾向の真偽、なども話題になるかもしれません。

知らなかったことに触れ、新しいものを学び、皆様の日々の矯正臨床に役立てられれば幸いです。

日本矯正歯科学会認定医の方は、当日、IDカードをお持ち下さい。セミナー参加者は、研修ポイント5点が加算されます。



(有楽町マリオン11階) (Tel.03-3284-0131)
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 (Fax.03-3213-4386)

今後のご案内

●第79回東京矯正歯科学会学術大会

日時：2020年7月9日(木)

会場：有楽町朝日ホール

※2020年度は春季セミナーの開催はありません

詳細は決まり次第学会ホームページに掲載いたします

東京矯正歯科学会

東京都豊島区駒込 1-43-9 (〒170-0003)

一般財団法人口腔保健協会内

TEL 03-3947-8891 FAX 03-3947-8341

2019年

東京矯正歯科学会 秋季セミナー

抜去か？ 保存か？ 第三大白歯の適切な対応を再考する

モデレーター：新井 一仁 学術委員長

講演者：山本 将仁 先生

丸川恵理子 先生

友成 博 先生

日時・2019年10月24日(木曜日)
午後6時より

場所・有楽町朝日ホール

当日会費・無料 (会員,会員同伴のコデンタルスタッフ)
¥3,000(非会員)

山本 将仁 先生



2008年3月 東京歯科大学卒業
2008年3月 第101回歯科医師国家試験合格
2008年4月 東京歯科大学水道橋病院にて歯科臨床研修医として勤務
2010年4月 東京歯科大学歯学研究科（解剖学専攻）入学
2014年3月 東京歯科大学歯学研究科（解剖学専攻）修了
2014年4月 東京歯科大学解剖学講座助教
2016年4月 東京歯科大学解剖学講座講師
2016年7月 スペインコンプルテンセ大学解剖学講座に留学現在にいたる

矯正歯科治療に役立つ臼歯後方部の解剖学 —伝統的な解剖学と新たな技術の融合—

約400年前より、正常な人体の形態と構造を研究するために人体解剖が盛んに行われるようになり、歯学・医学の発展に貢献してきました。学者たちが人体解剖の研究を継続し継承してきたことから、現代では人体のあらゆる構造が理解され、新発見は少なくなってきました。しかしながら、医療行為は時代とともに進化し、新たな技術が開発されるとそれを活かすための解剖学的な研究がいつの時代も必要とされてきました。

近年、矯正歯科治療において骨固定源であるアンカースクリューが導入され、大白歯の遠心移動が容易にできるようになりました。安全確実に大白歯の遠心移動を行うために、これまで注目されることのなかった大白歯後方部の局所解剖を理解する必要がでてきました。また、アンカースクリュー埋入の際に注意すべき顎骨の形態や、脈管・神経の走行についても把握しなければなりません。

今回の講演では、大白歯遠心の顎骨形態や、その周囲にある構造物について、上・下顎に分けて詳細にお話しさせていただきます。加えて、歯科矯正用アンカースクリューを安全確実に埋入するために知らなければならない人体の構造についても提示させていただきます。「歯科矯正用アンカースクリューを用いた矯正歯科治療に役立つ臼歯後方部の解剖」を先生方と一緒に考える時間となれば幸いです。

丸川恵理子 先生



1997年3月 東京医科歯科大学歯学部卒業
2000年2～3月 ドイツFreiburg大学顎顔面外科に留学
2000年3月 東京医科歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了
2000年4月 東京医科歯科大学歯学部附属病院口腔外科医員
2002年4月 日本学術振興会特別研究員
2004年8月 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎口腔外科学分野助教
2013年4月 東京医科歯科大学歯学部附属病院口腔外科講師
2014年6～8月 ドイツFreiburg大学顎顔面外科に留学
2017年4月 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎口腔外科学分野准教授
2019年4月 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面外科学分野准教授現在にいたる
歯学博士、日本口腔外科学会専門医・指導医、日本口腔外科学会代議員、日本再生医療学会認定医

第三大白歯の移植と矯正歯科治療

私が歯の移植を始めるようになってから12年が経過し、現在まで再移植も合わせておよそ600本の移植を行ってきた。プロトコルはメッシュ板とスーパーボンドを用いて、1か月間隣接歯の頬側にしっかりと固定することと移植床形成時に生じるわずかな骨移植を併用することが特徴であると思われる。また、数年前より抜歯即時型移植ではなく、抜歯後2～3か月経過してから行う近時移植が保険適用されたことから、その適応はさらに拡大された。一方で、歯の移植の限界を感じる症例がやはり存在する。ドナーとなる歯の歯根膜の状態を事前に予測することは不可能であり、コントロールもできない。移植床側の問題としては骨幅・高さが絶対的に不足しており、大きな骨移植を必要とする場合にはやはりサイズの豊富なインプラントのほうが発達しているといわざるをえない。

今まで手術を開始し、実際に移植できなかった症例は5症例程度である。ドナー歯が一塊として抜去できなかった場合と、歯が歯槽骨幅内に収まらなかった場合である。これらの経験から最近ではCBCTを事前に撮影し、ドナーとなる歯の歯根形態や歯根幅、歯根数の確認や移植床部の骨幅や高さを確認するようになった。移植において最も適応ではない症例は、骨幅がドナー歯の大きさにおいて不足している場合である。今回は、骨移植の併用で適応拡大された症例や歯の移植の適応ではない症例について、主に提示したいと思う。

現在、第三大白歯の抜去基準は意外にも決まったものがないように思える。歯の移植の観点からすると、周囲の歯への悪影響がない場合には、保存してあればいつか移植に使用可能となる。しかし、下顎の水平埋伏智歯の場合には歯列不正の要因となり、歯冠歯根分割しなければ抜歯できない場合に歯の移植の適応とはならないため、抜歯しておくメリットのほうが大きいといえる。今後は患者に応じて、第三大白歯の抜去基準を考え直す必要があると思われる。

友成 博 先生



2000年3月 鹿児島大学歯学部卒業
2006年4月 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科助教（口腔生理学）
2010年4月 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科助教（歯科矯正学）
2014年7月 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科修了歯学博士
2016年4月 鹿児島大学学術研究院医歯学域鹿児島大学病院講師（矯正歯科）
2018年11月 鶴見大学歯学部教授（歯科矯正学）

歯科矯正用アンカースクリューを併用した 矯正歯科治療による第三大白歯の排列

埋伏した第三大白歯は、智歯周囲炎、第二大白歯遠心のカリエス、歯槽骨レベルの低下、歯根吸収などさまざまな病的変化をしばしば引き起こします。一方、矯正歯科治療による臼歯の抜去や近心移動に伴って歯列後方部のスペースが増加した場合、第三大白歯の傾斜の程度、Nollaの分類による歯胚石灰化段階、患者の年齢などの条件次第で、上下顎第三大白歯の自然萌出が期待できると報告されています。近年増加する成人患者の矯正歯科治療においては、広範囲な歯冠修復や根管治療歯、根尖病巣、歯根吸収などの予後不良と考えられる歯の増加により、抜歯部位の決定に苦慮する機会が増えてきました。一般的な矯正歯科治療では、歯の移動効率から小臼歯部を抜去することが多いですが、これらの歯が健全であり、隣在歯などに予後不良歯が存在する場合、可及的に健全な歯を残存させて治療を行うことができないか、治療方針を検討してみることが大切です。抜歯部位によっては、固定源の確保が難しく、フォースシステムが複雑になるなどの問題点も生じます。しかし近年、歯科矯正用アンカースクリューなど骨内固定源を加強固定に用いることで、埋伏した第三大白歯を積極的に歯列内誘導し、残された健全歯を可及的に温存した咬合を確立することができるようになり、有効な選択肢の一つとなってきています。

今回、歯科矯正用アンカースクリューを併用して、予後不良な小・大白歯を抜去し、埋伏した上下顎第三大白歯に置き換えることで、機能的な臼歯部咬合を獲得した症例を供覧し、第三大白歯の咬合参加への有用性について再考したいと思います。